

【新生インド誕生】巨大国家の出現なるか

「変革と成長」を 実現できるか モディ新首相 “5年”の約束



インド・ビジネス・センター社長 島田 卓

間抜けな政治家はいらない 宗教を越えて集まった支持

五月に行われた下院五四三議席をめぐるインド総選挙は、BJP（インド人民党）が二八五議席と単独過半数を獲得し圧勝。一方、与党だった国民会議派は改選前の二〇六議席から四四議席へと壊滅的打撃を受けた。

日本を含め欧米メディアはBJPの地滑りの勝利と伝えたが、より正確にはナレンドラ・モディ（グジャラート州前首相）個人の圧倒的勝利と言うべきであろう。

選挙戦序盤ではBJPのナンバリー・ツーで長老のアドバニ元副首相（兼BJP元総裁）などが、秘蔵っ子スシマ・スワラジ（下院野党議員団長を務め新内閣で外務大臣に就任）を推していた。だが、日が経つにつれモディへの国民の圧倒的な支持に触れ、モディを前面に出した戦いしか選択肢がなくなつた。結局、立候補者の人選から選挙区割りまで、すべてモディの意思通りになった。それほどまでに

モディの威力は絶大だった。昨年九月に本格的な選挙キャンペーンに入ってから選挙活動を終結させた五月一日まで、モディが走破した距離は地球七周半に相当する三〇万キロ、政治集会は五〇〇回を超えた。ユーチューブの閲覧回数一三〇〇万回、フェイスブックのリンク一三〇〇万、ツイッターのフォロアーは四〇〇万人と、米大統領並みの選挙戦を展開した。

一方の国民会議派の顔、ラフル・ガンディーはモディの選挙活動の三分の一程度。大手ブックメーカーは四月末には、次期首相候補からラフルを除外してしまった。インドを代表する週刊誌『India Today』の総帥かつ編集長であるアルン・プリーシーは、「モディは九カ月にわたる絨毯爆撃的選挙キャンペーンを成功裏に収め、政治対話はモディに始まり、モディで終わることを全有権者の頭に徹底的に叩き込んだ」（同誌五月一九日号）と書いた。また、投票が開始される直前のツイッタ

ーには「間抜けな政治家より、殺人者であっても彼を選ぶ」とまで書かれた。

「間抜けな政治家」とは暗にラフルを指す。「殺人者であっても」はモディのことだ。モディは二〇〇二年グジャラート州で起きたムスリムとヒンドゥー教徒の騒乱で一〇〇人以上の死者を出したときの州首相で、積極的に鎮圧介入しなかったとの責任を問われた。

最高裁では無罪判決を得ているが、インドで根深い宗教問題を越えてでも、インド国民が何を望んでいるかをこのツイッターは明確に表現している。

すなわち、劣化国家と化したインドを変革し、成長をもたらしてくれる者はモディ以外にはいないということだ。この二つの言葉「変革と成長」が今後のモディの政治活動を読み解く上でのキーワードになる。

全国民主同盟と国民会議派を 機能不全に陥れた暴露本

一方で、約六〇年もの間、イン

ドを統治してきた国民会議派「ネルー・ガンディー王朝一家は、もはや再起不能の状況だ。それは総選挙前から明らかだった。投票が開始される直前の四月には、自らの陣営から紙爆弾が投げられた。

マンモハン・シン首相の第一期（二〇〇四年～〇九年）のメデア・アドバイザーを務めたサンジヤヤ・バルーの暴露本『偶発首相（Accidental Prime Minister）』が

それだ。バルーはアドバイザーに任命される際、シン首相からこう告白されたという。「一つだけ肝に銘じておいて欲しい。最高権力者は二人いてはいけない。それを受け入れた上で首相になった」と。

最高権力者とは言うまでもなく国民会議派総裁のソニア・ガンディーであり、ネルー・ガンディー王朝一家のことと理解するのが妥当だ。シン首相は自ら傀儡政権であることを認めたことになる。

実際、シン首相は「Mr. No Decision（決められない首相）」とまで揶揄されていた。その迷走ぶりは、選挙戦が始ま

った初期にも起こっている。昨年七月一日、インド最高裁は「国民代表法」で定める「有罪判決を受けた国会および州議会議員が三カ月以内に上訴すれば失職を猶予される」との条項が違憲との判決を下した。被選挙権資格は有罪判決により即時に失効するのに、現職議員だけにこういった特典を与えることは矛盾するとの判断だ。

だが、国民会議派にはこの猶予条項をたてに議員資格を保持している大物がいる。シン内閣は彼らを保護するための閣議決定を行い、九月二四日には国会審議を必要としない大統領令に持ち込み強引にこれを通した。これに対しラフルが激高、「ナンセンス、ゴミ箱行きだ」と発言。総選挙を睨み事態収束を図るシン内閣は一〇月二日、自身で決めた閣議決定を自らの手で撤回しラフルの指示に従うという前代未聞の失態を演じたのだ。

その一方で、母親のソニアが国民会議派はシン首相を全面的に支持していると発言、王朝の支離滅裂状況もピークに達していた。機

能不全は暴露本以前の話だったわけだ。

国民会議派がインドに残した傷跡は深い。ワールド・エコノミックス・フォーラムによるインフラ整備度ランクでは、インドは世界一四八カ国中八五位。米ヘリテージ財団が発表した二〇一四年の世界経済自由度指数では、インドは世界第一二〇位だ。これではいくら眠れる巨象として潜在的経済発展能力があるが、高度成長の持続は不可能だ。

モディが再現を狙う グジャラートモデル

「私に六〇カ月くれ、インドを変えてみせる」――選挙期間中、モディはこう熱心に説いて回った。インドの国会議員の任期は五年、つまり六〇カ月。過半数を握る単独政権なら解散もない。つまり五年でインドを変えてみせるというにしているわけだ。

とにかく自信満々なのだ。首相就任から数週間しか経っていないモディにインタビュールしたインド



首相官邸就任式でのモディ氏(右)。(©Reuters)

のあるジャーナリストは、「もう何年もやっているようで、新米首相だなんてことを微塵も感じさせない」という。

その裏には、一〇数年間の施政

でグジャラート州をインドきつての産業発展モデル州とした自信がある。選挙戦を通して、グジャラートモデルの必要性は、一般庶民や貧困層にまで理解されている。だから、「国民が私を担ぐ。州と中央は違うという人がいるが私は変えられる」というのがモディ理論だ。

ではモディが推進したグジャラートモデルとは一体どのようなものなのか。第一にそれは国民会議派体制の否定でもあった。問題点を明確にし、適材適所でモラルを上げ信賞必罰、私心を持たず不転政の政治意志を貫徹することだった。具体的に注力したのはインフラ

整備と諸制度の簡潔化だ。道路建設を急ぎ、インド唯一の電化州と、運河建設による水の確保を行った。さらに、環境問題を考慮し、再生可能エネルギー導入に意を砕いた。グジャラート州はいま、インド最大の太陽光発電量を誇る。インフラ整備と共に企業誘致にも邁進。そのため土地取得申請手続きの簡素化や許認可業務窓口の一本化などを行った。例えば、弊社が最近代理で行ったグジャラート州サナンド地区(タタ自動車の電撃的進出で有名)の土地取得申請では、グジャラート州政府の関連WEBサイトから申請し、受理されると審査会に呼ばれ、一〇分程度のプレゼンと口頭質疑を経るとその場で内認可が申し渡され、あとは正式通知を待つばかり、といったスピーディさだ。

同時に農業の近代化も図った。農産物市場委員会法(Agricultural Produce Marketing Committee Act)を修正し、農家が仲介業者を通さず直接卸や輸出業者などに販売できるようにし、中間業者を排除することで流通効率を上げた。その結果、農家の所得は上昇、小売価格の低下をもたらした。農業年の価格安定が図られ、州の農業年間平均成長率は七・七割と、全国平均の二・六割を大幅に上回っている。

また、既得権益の巢窟である公営企業改革も行った。代表例が州電力庁(GSEB)の大改革だ。まず政治家をお飾りのなトップに据えることをやめ、有能な官僚を抜擢し大幅な権限を与えた。その上で、関連法規を改正、GSEBを持ち株会社にし、発電、送電、配電を分け、別々の会社にした。また、一般家庭と割安の電気料金

が割り当てられている農家への給電路も分離した。

さらに盗電、漏電を防ぐための特別警察署を五箇所設置した。ち

なみにインドでは発電量の三〇、四〇割が盗電、漏電で最終消費者に届かないとされる。そのため慢性的な電力不足と補助金給付による財政赤字の拡大を招いている。グジャラート州ではこれらの施策により、効率的な電力供給が可能になり、盗電や電気料金の不払いもなくなったと言われている。

モディ政権下のグジャラート州の州内総生産(GSDP)は二〇〇〇年から二〇一一年まで平均八・九割と全国平均の七・四割を上回りトップに立つ。

首相となったモディが目指すのは、中央政府と各州政府の協調を図り、グジャラートモデルの全国展開を推し進めることだ。

州との融和、協業を図る モディを固める官僚たち

五月一六日の大勝利の興奮が冷めやらぬ翌一七日の早朝、六〇代の男五人が首都ニューデリーにあるグジャラート州事務所を、報道陣に気付かれぬようひっそりと訪れた。モディが自らの右腕と頼む

男を人選、最終選考のために呼んだ人物たちだ。彼らは個室とプレゼン資料作成のための助手をあてがわれ、夕刻までモディに対する提案書作りに励んだ。

その結果、首相首席秘書官に選ばれたのがニリペンドラ・ミスラ(Nirpendra Misra)だ。インド最大州のウツタル・プラデシユ州で一九六七年インド行政職(IAS)に任官した彼は、モディの政敵ムラヤム・シン・ヤダブが同州首相であったときの主席次官を務めている。ウツタル・プラデシユ州は各州との協業を図るモディが最も重視する州だ。

次点はミスラと同期で、ケララ州からインド警察職(IPS)に任官したアジット・ドバル(Ajit Doyal)で、彼は国家安全保障顧問に任命された。国家情報局長を務め、スパイ集団の親玉として伝説化された人物だ。

バリバリの若手も登用した。グジャラート州でモディに仕えてきた一九八八年IAS任官のアルビンド・K・シヤルマ(Arvind K.

Sharma)と、彼と同期でインド森林職(IFS)で任官したバラット・ラル(Bharat Lal)である。彼ら四人はモディ首相に直言できる立場にあり、首相府主導の政治姿勢を打ち出すモディ政権では大臣よりも重きを成すと思われる。身内人事とは無縁で、実績と資質を重んじたモディならではの人事とも言える。

さて、首相受諾演説の最中、声を詰まらせ、感極まって涙を流したモディ。おそらくインド憲政史上これ程までに切実な思いを込めて首相になった人物はいなかったのではないかと。

「屁理屈はいらない、結果を出せ。スキャン(ダル)国家をスキルル国家に変える」と檄を飛ばす。増加する若者の雇用確保のため工業化を進め、必要なエネルギーはクリーンの比率を高める。規制緩和を進め、ガバナンスの透明度を高める。中央と州政府との風通しをよくし、不必要な中間業者を排除し、効率のよい行政を行う。そのためにはICT(情報通信技術)

を最大限活用し、e・ガバナンスを推進する。こうした施策で、貧困をなくし、安定した物価の下での経済発展を図る。

モディが選挙期間中訴えたのは、「皆で勝ち取る、皆の発展」という言葉だ。あるインドの友人はこう言う。「モディが言ったこと、二、三割でも実現してくれたらインドは変わる」と。

マックス・ウエーバーが言うように、「政治という仕事は、情熱と判断力の両方を使いながら硬い板に力を込めて、ゆっくりと穴を開けていくような仕事」だ。それは、「出来ないことなど何もない。諦めることなく努力を続けていければ」というヘレン・ケラーの言葉につながる——モディによってインドは生まれ変わる、と私は信じた。

●しまた・たかし 一九四八年生まれ。明治大学商学部卒業。七二年東京銀行入行。本店営業部、ロサンゼルス支店、事務管理部長、大阪支店を経て、九一年インド・ニューデリー支店次長、九五年度アジア・オセアニア部次長。九七年同行退職。同年四月に株式会社インド・ビジネス・センターを設立、代表取締役社長に就任。